

「書くことで強くなる」

城山中学校 三年 神田 志成

僕にはどうしても行きたい高校がある。その高校は難易度が高く、合格を掴むため、日々勉強に精を出している。ところが家で勉強していると、母に用事を頼まれたり、弟がすぐそばで楽しそうにテレビを見ていたりして、集中しようと思っても遊びや怠け心の誘惑もたびたび襲ってくる。それでも中学三年生の僕は「この高校に行きたい」という思いで、必死に自分を律して机に向かっていった。

そんな中で、母から「まだ休憩しているの?」「その勉強法は効率が悪いよ」と否定的な言葉をかけられることがある。そのたびに、胸の奥がざわつき、悔しくなっていく。言い返してしまうことがあった。自分は頑張っているのに、どうしても分かってくれないのかと、悔しい思いが、心の底に積もっていった。

そんな時、亡くなった祖父の遺品の中から、中学生時代の日記が出てきた。古い大学ノートに、鉛筆でびっしり書かれた文字。開いてみると、勉強の進み具合だけでなく、家族や周囲への苛立ちなどが、率直な言葉で綴られていた。中には「父に泣かされて悔しい」と感情をむき出しにした一節もあった。一方で「フアイト」「誰にも負けるな」と自分を奮い立たせる言葉も、何度も目に入ってくる。日記は、失敗や苛立ちだけで終わらない。「今日も勉強が思うように進まなかった。でもやるしかない」と、必ず前向きな言葉で締めくくられていた。普段は穏やかで、強い口調を聞いたことのなかった祖父にも、同じ年頃にこんな葛藤があったのかと驚いた。苦しんでいたのは自分だけじゃないと胸が軽くなる。ページをめくるたびに、祖父の声が聞こえるような気がした。

僕もこの方法をやってみたいと思い、さっそく大学ノートを買って、祖父にならって、勉強の後にその日の出来事や感じたことを書き始めた。内容は、家族に言えない苛立ちや、不安、焦り、そして小さな喜びまで様々だ。誰にも見せないつもりだからこそ、遠慮なく素直に書ける。書き終えると、頭の中がすっきりと整理され、気持ちが軽くなるのを感じた。ノートは僕のもう一つの心の居場所になった。

続けるうちに、自分の気持ちを客観的に見られるようになった。以前なら母の言葉にすぐ反発していたが、ノートに書いてから考えることで、「母なりの心配だったのかもしれない」と思える日も増えている。そして、この変化が思わぬ形で成果をもたらした。

ある模擬試験で結果が振るわず、自分でも驚くほど落ち込んだことが

あった。以前の僕なら、そのままやる気をなくしていたかもしれない。しかし、その夜ノートに向かい、「今日は悔しかった。けれど、ここから巻き返す」と書き続けるうちに「次は同じミスをしないぞ。」と前向きに頑張る気持ちに切り替える事ができた。また、日常でも効果を感じる場面はあった。家で弟と言い争いになり気持ちが荒れてしまった時も、ノートに自分の気持ちを書くことで冷静になれば、翌日には穏やかな心を取り戻すことができていた。小さなことかもしれないが、「書く」ことで僕は自分を立て直す方法を手に入れたのだ。

受験はこれからが本番だ。きっと思うようにいかない日も、落ち込む日もあるだろう。けれど、祖父から受け継いだこの「書く習慣」があれば、僕は何度でも立ち直れるはずだ。ページをめくれば、自分が積み重ねた日々が並んでいて、そこからまた前に進む力をもらえる。

僕はこれからも、勉強の合間にノートを開き、心の中を文字にしている。そして必ず、この春には合格通知を手にする。その時、ノートの最後のページにこう書きたい「やったぞ。ありがとう、おじいちゃん」と。僕と同じように悩む同世代の人にも、声を大にして伝えたい。書くことは、自分を支える力になるということを。